

質的分析手法を用いた 学生支援に関するIRの実践



金沢大学 国際基幹教育院
高等教育開発・支援系
上畠 洋佑

E-mail: yousukeu@staff.kanazawa-u.ac.jp

平成28年度第5回 IR実務担当者連絡会
日時：2月27日(月) 14時3分～14時20分
場所：佐賀大学本庄キャンパス 教養教育2号館215教室

本事例報告の目的

金沢大学では、第3期中期計画・目標の下に、金沢大学憲章にうたう「自学自習」を支える組織的取り組みの方針を意味する学習支援・学生支援に関わる「バックアップ・ポリシー」を策定することを目指している。

このポリシー策定に向けて、学生支援部署の教職員を対象にしたインタビュー調査を実施し、この調査データを質的分析手法の一つである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析し、学習・学生支援の現状等をまとめた報告と今後の提案を行った。本発表では、当該実践のプロセスと結果について紹介する。

第3期中期計画・目標

(3) 学生への支援に関する目標を達成するための措置

中期目標〔3〕入学から卒業までの徹底した学生支援を行う。

中期計画

〔3-1〕第2期中期目標期間において整備した学生支援体制を更に発展させ、新たに学生生活支援の総合窓口を設置し、各種学生支援のワンストップ・サービスを実施する。

28年度計画

◆入学から卒業・修了までの学生支援総合窓口となる**スチューデント・バックアップ・センター（仮称）**の設置について検討する。

「金沢大学憲章」とは

金沢大学が国立大学法人化する際に、大学が拠って立つ理念と目標を金沢大学憲章として制定した。

教育・研究・社会貢献・運営で各2条項 計8条項

「自学自習」については「教育」に記載

2. 金沢大学は、学生の個性と学ぶ権利を尊重し、
自学自習を基本とする。

抽象的な条項からどのようにポリシーを策定するか？

先行事例

AIR (Association for Institutional Research)
「NEW DIRECTION FOR INSTITUTIONAL RESEARCH」
「Volume 2015, Issue 165 : Special Issue: Partners in
Advancing Student Learning: Degree Qualifications Profile
and Tuning」より

DQP (※) に係る I R の 4 つの役割について論じ、その内のひとつである「協働と調整」の役割においては、**I R は積極的に大学内の部局間と協働し、繋がりを探す必要性がある**ことを述べている (Natasha and Jillian 2015:23) 。

DQP (Degree Qualifications Profile) とは日本では、学位資格プロフィールと訳されることが多く、学生が専門とする領域とは関係なく、学士、修士などの異なる学位レベル間と、異なる学位間で共通して期待される熟達度をどのように学生が証明できたのかを文書として明示する参照基準を意味する。

先行事例

セントメアリーカレッジにおけるDQPプロジェクトの事例研究をまとめる中で、IRがDQPに係る大学内の部局間の認識に相違があることを分析する役割を担っていたことを記述している。

一般教養科目カリキュラムと専門教育科目カリキュラムにおける相違点を洗い出す際に、IR部署のディレクターとアシスタント・ディレクターがグループワークセッションを開催し、この運営を担いながら、そこで出たグループワークの結果を、**質的分析手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ**（以下「GTA」）を用いて分析し、プロジェクトにおける共通の課題を明確にした（Jessica and Daniel 2015:33,34）。

先行事例

ゲルモンほか（2001）がポートランド州立大学でのサービスラーニングとそのアセスメント（評価）の実践から具体的なアセスメントの方法等をまとめている。

この中でサービスラーニングに関して、**大学機関へのインタビューを行う**ことにより「地域に根ざした教育活動の役割について、大学職員や執行部の認識が明らかになる（ゲルモンほか、2001:168）」と述べている。

先行事例

金沢大学での質的分析手法を用いたIRの実践

「フォーカスグループインタビューによる教学IRの実践」

調査時期：2015年12月、2016年1月（9日間）

対象者：人間社会・理工学域全学類から各学年5名を抽出

実施対象者：187名（約78%） 内訳は下表の通り



学域	学類	合計				合計
		1年	2年	3年	4年	
人間社会学域	6学類	4	5	5	4	18
		4	1	3	1	9
		2	3	2	4	11
		2	3	2	5	12
		5	3	7	3	18
		4	4	3	3	14
理工学域	6学類	5	5	3	5	18
		5	4	5	5	19
		5	5	5	5	20
		3	4	5	5	17
		4	5	4	5	18
		4	3	2	4	13
合計		187				

学生支援部署インタビュー調査

1. 調査の趣旨

本学の学士課程学生と窓口や日常学習支援等を行う部署にインタビューを実施し、日常業務から見る・感じる学生の現状、学生・学習支援業務の詳細、業務上の具体的な取り組み、業務上業務で接し、学生・の意識、学内の学習支援・学生支援のリソースの把握などについてインタビューを行い情報収集する。

ここで収集した情報を、大学教育再生加速プログラム事業計画のひとつであるバックアップポリシー策定のために活用することとする。当該ヒアリングは、2016年6月16日に開催された第7回「大学教育再生加速プログラム第3WG」での承認を受けて実施するものである。

2. 実施期間と所要時間

期間：2016年7月11日（月）～8月5日（金） 土日除く勤務時間内

所要時間：1部署あたり1時間前後を想定

（グループでの半構造化インタビュー形式）

学生支援部署インタビュー調査

3. 対象部署

学務課 教務係

基幹教育支援課 基幹教育学務係

学生支援課 学生支援係

学生支援課 学生相談係

学生支援課 就職指導係

情報サービス課 中央図書館係

(自然科学系図書館、医学図書館、保健学類図書室含む)

国際機構支援室 留学生係

人間社会系事務部学生課 人文・国際学務係

人間社会系事務部学生課 法・経済学務係

人間社会系事務部学生課 教育・地域学務係

理工系事務部学生課 教務係

理工系事務部学生課 学生係

医薬保健系事務部学生課 医学学務係

医薬保健系事務部学生課 保健学務係

医薬保健系事務部薬学・がん研支援課 薬学学務係

保健管理センター

学生支援部署インタビュー調査

4. 質問事項

(1) 日常業務から見る・感じる学生の現状について

- ① 学生との関わりについて
- ② 業務で接する学生の姿について

(2) 学生・学習支援業務について

- ① 部署内の役割について
- ② 業務上困難に感じていること、問題意識、改善したい点について

(3) 自部署ならではの業務・取り組みについて

(4) 業務を行う上での意識

(又は部署の学生・学修支援に関わるミッション) について

(5) 学内の学習支援・学生支援のリソースについて

- ① 部署で発行するパンフレット等について
- ② 部署で実施する調査について

学生支援部署インタビュー調査

5. 実施結果

対象19部署の内18部署に対してインタビュー調査を実施した。

総インタビュー回数は15回（複数部署同時に実施したのが2回）。

総時間は1240分（20.7時間）であった。

本ヒアリングに関わるインタビュイーは37名であった。

6. 収集したデータの分析方法

収集したデータの分析方法には、質的研究手法である

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を採用した。

バックアップポリシーを策定する上での本学における学生支援等の現状整理を元に、今後のプロセスを現実的に検討する上で、当該分析方法における「結果図」（=可視化）と「ストーリーライン」（=情報の共有、共有可能な物語の作成）が活用できると考えた。

学生支援部署インタビュー調査

5. 実施結果（一覧）

順番	部署名	実施日時	時間(分)	対応者①	対応者②	対応者③	対応者④	人数	
1	学務課 教務係	7/20(水) 10時～	71	係長	主任	主任		3	
2	学生支援課 学生相談係	7/21(木) 9時～	97	係長	一般職員			2	
3	情報サービス課 自然科学系図書館	7/21(木) 13時30分～	68	図書係長	図書館職員			2	
4	人間社会系事務部学生課 人文・国際学務係	7/21(木) 15時～	85	一般職員				1	
	人間社会系事務部学生課 法・経済学務係			主任				1	
	人間社会系事務部学生課 教育・地域学務係			一般職員				1	
5	情報サービス課 医学図書館	7/22(金)10時30分～	79	図書係長				1	
	情報サービス課 保健学類図書室			図書主任				1	
6	保健管理センター	7/22(金)13時30分～	100	教授	准教授	保健師	保健師	4	
7	医薬保健系事務部学生課 保健学務係	7/22(金)15時30分～	92	係長	主任	主任		3	
8	学生支援課 学生支援係	7/26(火)9時～	74	係長	主任			2	
9	理工系事務部学生課 学生係	7/26(火)10時30分～	90	係長	一般職員	一般職員		3	
10	情報サービス課 中央図書館係	7/29(金) 9時～	72	課長	図書係長			2	
11	医薬保健系事務部薬学・がん研支援課 薬学学務係	7/29(金) 10時30分～	72	係長	主任	派遣職員		3	
12	基幹教育支援課 基幹教育学務係	7/29(金) 15時00分～	76	係長	主任			2	
13	国際機構支援室 留学生係	8/4(木)10時30分～	80	係長	一般職員			2	
14	理工系事務部学生課 教務係	8/8(月) 10時～	76	係長	主任	一般職員		3	
15	学生支援課 就職指導係	8/8(月) 13時～	108	係長				1	
16	医薬保健系事務部学生課 医学学務係	(未実施)	-	-	-	-	-	-	
			合計→	1240				合計→	37
			平均(／インタビュー回数)→	82.67				平均(／インタビュー回数)→	2.47
			平均(／部署数)→	68.89				平均(／部署数)→	2.06

M-GTAとは

GTAは4つのタイプ「オリジナル版」、「Strauss・Cobin版」、「Glaser版」、「M-GTA」が存在するが、M-GTAを分析手法として採用した理由は「広くヒューマンサービスに関わる領域にM-GTAが有効な研究方法である」（木下, 2005:18）点と「オリジナル版で示された基本特性（理論生成への志向性、grounded-on-dataの原則（中略）等）を継承し、深い解釈を可能とする独自の分析方法を提示したもの」（木下, 2007:15）である点の2点である。

すなわち、大学の学生支援というヒューマンサービスについて、深い解釈を可能にすることを上畠が志向したためである・・・

・・・ここだけの話

日本人が欧米の質的研究手法を作り直したものだから。
大妻女子大学の保健管理センターの上手くいった事例を聞いたから。
分析方法の学習書が多く、記述も非常にわかりやすいから。
知人の研究者との勉強会でM-GTAを勉強していたから。

M-GTA：分析の手続きと結果

インタビューの音声記録と筆者のインタビューメモを用いて計58の概念（小カテゴリー）を明示したワークシート（次のスライドを参照）を作成した。

概念（小カテゴリー）形成のプロセス例

「大学近隣に住む学士課程学生や大学院生と遠方に住む社会人学生では、学生支援のアプローチが異なる」という発言は「異なる社会人学生支援」として概念化（小カテゴリー化）を行う。

また「日本人の学生は集団として一括対応が可能であるが、留学生は各自の事情により個別対応になるため、同じ学生支援としてひとつに語ることが難しい」という発言は「個別化する留学生支援」として概念化（小カテゴリー化）を行う。

M-GTA：分析の手続きと結果

ワークシート例

概念名	異なる社会人学生支援
定義	大学近隣に住む学士課程学生や大学院生と遠方に住む社会人学生では、学生支援のアプローチが異なる。
具体例	(1) ○○部署 ◎さんの発言 社会人院生に重要な事務連絡書類を登録されている住所に送付したら、会社に再送してもらえないかといわれた。 (インタビューメモ・・・に記載) (音声記録・・・の○分○秒～○分○秒)
理論的 メモ	<具体例ごとの解釈メモ> (1) 社会人学生は個別対応になってしまう。

M-GTA：分析の手続きと結果

作成した58個の概念（小カテゴリー）を俯瞰的に眺め、類似する概念（小カテゴリー）を集めた結果、4つのコア概念（大カテゴリー）を形成することができた。

以下に4つのコア概念の内「支援対象の検討」のみを記載する。

バックアップポリシー策定のための学生支援等部署へのヒアリング結果より作成した概念表			
コア概念 (大カテゴリー)	概念(小カテゴリー)	定義	主な内容(生データ)
支援対象の検討	「学生」の定義化	大学に在籍する「学生」の設定が必要である。学士課程、留学生、大学院生、社会人学生など全てを含むのか。	音声記録、ヒアリング記録(省略)
支援対象の検討	支援対象の明確化	学生支援をする上でどのような範囲で支援をするのか設定する必要がある。学習・修支援、学生生活支援、就職支援、障がい学生支援で区分けするのか。	音声記録、ヒアリング記録(省略)
支援対象の検討	社会人院生への学生支援	理工系、保健系における社会人院生対応する割合が多い。	音声記録、ヒアリング記録(省略)

M-GTA：分析の手続きと結果

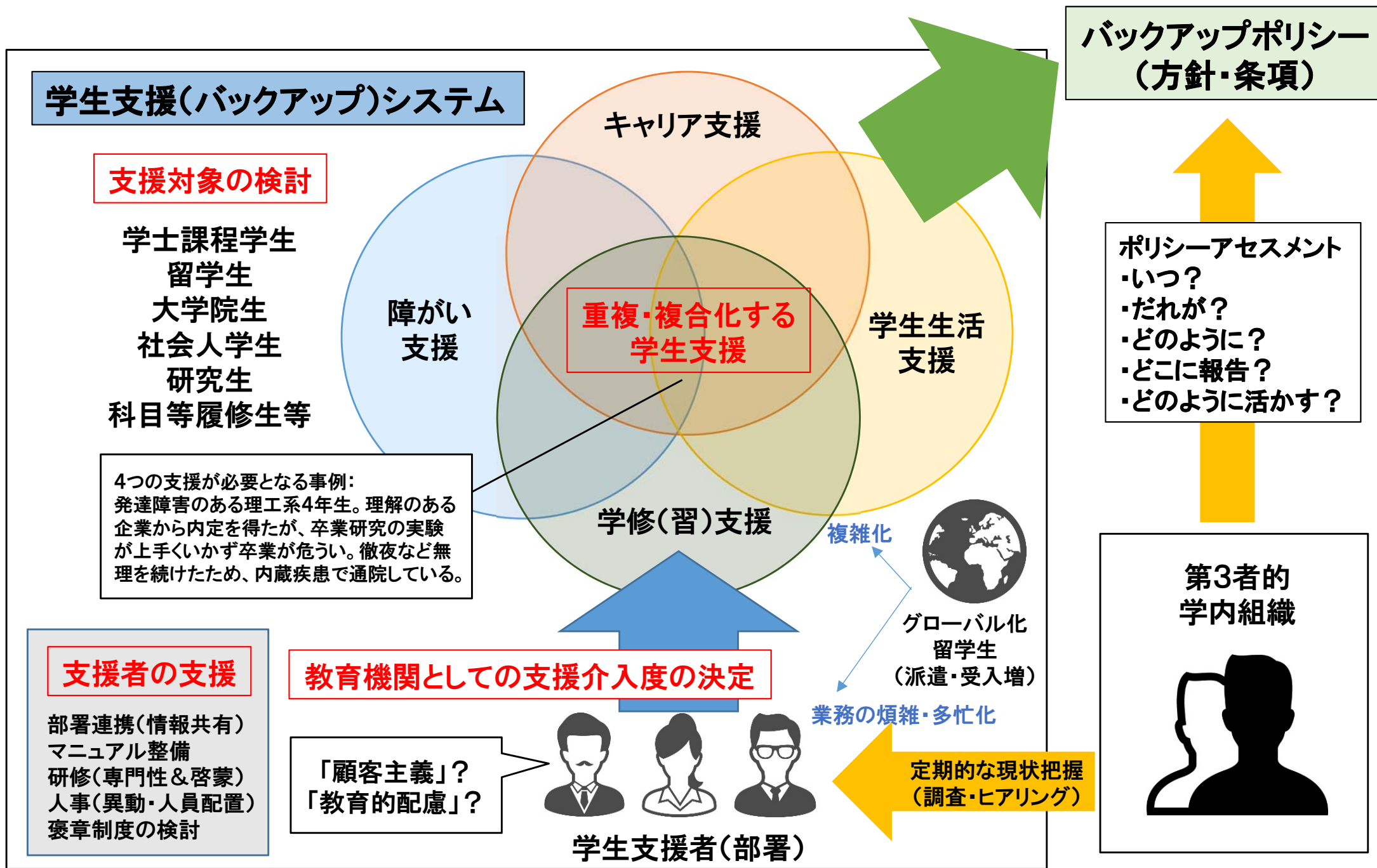
形成した58個の概念（小カテゴリー）と、4つのコア概念（大カテゴリー）を用いて「結果図」を作成した。

M-GTAにおける「結果図」とは、分析結果の全体として生成した概念（小カテゴリー）とコア概念（大カテゴリー）の相互関係を表す図であると定義されている（木下, 2007:223,227）。

4つのコア概念（大カテゴリー）は次のスライドの「結果図」に赤文字で記載されている「支援対象の検討」「重複・複合化する学生支援」「支援者の支援」「教育機関としての支援介入度の決定」である。

4つのコア概念については「ストーリーライン」で説明を行う。

バックアップポリシー策定のための学生支援部署インタビュー調査 結果図



M-GTA：分析の手続きと結果

M-GTAにおいて、生成した概念（小カテゴリー）とコア概念（大カテゴリー）だけを用いて、「結果図」を簡潔に文章化することを「ストーリーライン」と定義されている（木下, 2007:223）。

「1. 支援対象の検討」

インタビューから、学士課程学生、留学生、大学院生、社会人学生、研究生、科目等履修生といった「学生」定義のゆらぎを抽出することができた。どの区分の「学生」を学生支援の対象範囲とするのか検討する必要性が明らかになった。支援対象が決まることにより、学生支援の方針や学生支援のシステムも異なってくる。

「2. 重複・複合化する学生支援」

インタビューから学生支援の領域は「キャリア支援」「障がい支援」「学修（習）支援」「学生生活支援」の4つに大別することができた。しかし4つの領域はそれぞれが独立しているのではなく、2つの領域が重複した学生支援が必要であったり、2つ以上の領域が重なりあって複合化した学生支援が必要であったりする可能性が示唆された。

M-GTA：分析の手続きと結果

「3. 支援者の支援」

インタビューを通して、ほぼ全ての学生支援系部署より現状の困窮や負担の状況を聞き取ることができた。職員は効率的かつ安定的な大学の組織運営において大きな役割を担っている。

大学機関としての学生支援部署及びそこに従事する支援職員の支援が必要である。学生支援部署・職員が疲弊し、機能不全に陥った状況では、どのような理想的な学生支援システムも実現不可能になってしまう。

「4. 教育機関としての支援介入度の決定」

部署間、個人間で学生支援に関わる方針や意識、介入のレベルが異なっていた。具体的にはどこまで学生を支援すればいいのかインタビューを受けた全ての教職員が迷っている状況であった。

大学組織としての学生支援の方針と介入の判断基準を設定することを学生支援部署・職員は希望している。

調査結果の活用

- ・ 調査結果からバックアップ・ポリシー原案を作成した。
- ・ 理事（教育担当）に調査結果を報告しポリシー原案を説明。
- ・ 2017年1月及び2月に2名の
特任助教（アカデミック・アドバイジング）が入職。
- ・ 上記2名を加えたバックアップ・ポリシーと学生支援体制の
具体的な検討が進み、3月上旬に開催される全学教育企画会議
に提案するバックアップ・ポリシー案が作成された。
- ・ インタビューした学生支援部署へのフィードバックを予定。
（バックアップ・ポリシーへの意見聴取も検討中）

バックアップ・ポリシー案

金沢大学憲章で謳う教育の理念に基づき、本学教職員はすべての学生の個性と学ぶ権利を尊重する学習者中心主義に立った学生の支援を行い、予防的視野を踏まえた、バックアップ・ポリシーを以下の条項を添えてここに宣言する。

0. 包括的な学生生活支援（案）：学生サポートセンター4部門の連携のもとに進める
1. 学修支援・学習支援（案）：高大接続コア部門、学習支援コア部門
2. キャリア形成支援（途中）：キャリアデザインコア部門
3. ヘルスケア（案）：ヘルス・ケアコア部門
4. 障がい学生支援（案）：障がい学生支援室

上記の取り組みを支える質保証として、教職員・学修支援学生スタッフ等の支援担当者を支援する体制の整備、情報共有のためのFD・SD活動の実施、学生支援を行う上での介入度を平準化するアカデミックサービス支援基準の策定、継続的な本ポリシーの見直し及び本ポリシーに基づく支援体制の検証を行う。

5. 支援担当者の支援、情報共有支援のためのFD・SD研修、支援担当者の支援を行う者の配置
6. アカデミックサービス支援基準の策定（学生への介入度を平準化する、リスクを取る）
7. 継続的なポリシーのアセスメント（学生の行動変容の把握）と教職員の改善活動によるPDCAの実施

実践からの考察

- IRが取り扱うデータは量的・質的データ両方である。
- GTAは質的なデータを用いて、大学内の共通の課題を明らかにする上で、有効・有益な分析方法である。
- インタビュー調査を通して、明文化されていない大学内の部署間の繋がりや関係性（人対人の関係性も含む）を知ることができる。
- インタビュー調査を通して、IR担当者が何者かを伝えることができる。（＝学内での関係性の構築）
- IR担当者としての「コンテキスト把握力」を磨く良い機会になる。
- 学内のネガティブな面を拾い上げ、昇華できる可能性がある。

他の質的調査の実践①

実施日時：2016年10月4～7日、11月1～9日

対象学生：2016年度GS科目群 Q3開講

「A科目（担当：B先生）」

「C科目（担当：D先生）」

日本語で受講する学生と英語で受講する学生 計20名

対象学年：学士課程1年生

手法：インタビュアー（1～2名）に対して

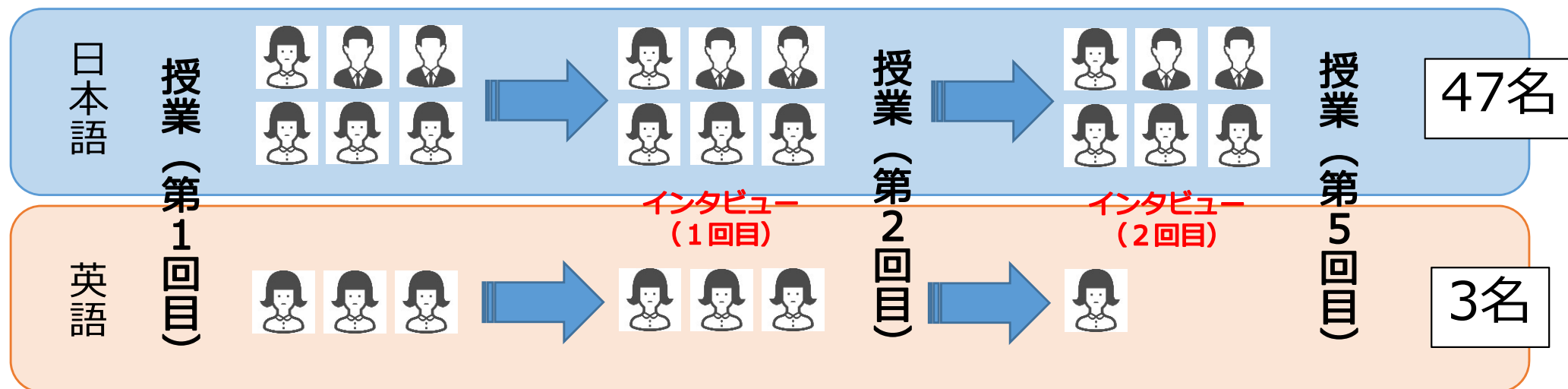
インタビュイー学生1～5名でのデプス・インタビュー

担当者：国際基幹教育院高等教育開発・支援系 上畠

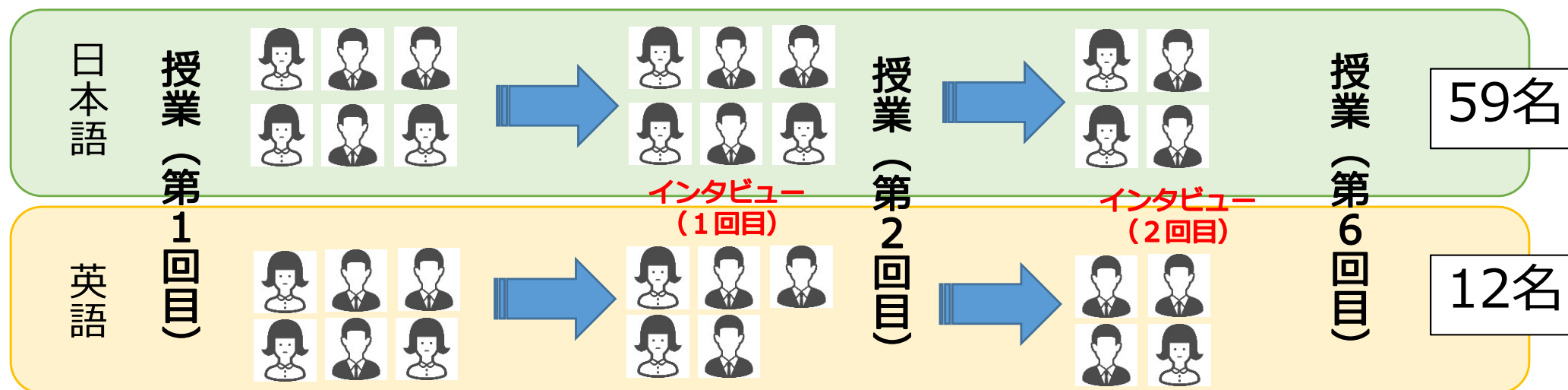


他の質的調査の実践②

「A科目（担当：B先生）」



「C科目（担当：D先生）」



参考文献

【和書・国内論文等】

- 蝶慎一 2011「『学生の視点』からみる学生支援」『大学経営政策研究』1,pp.167-183
- 蝶慎一 2012「新制大学における『厚生補導』が大学基準に追加される経緯に関する一考察－『学徒厚生審議会』の審議過程と答申（1951年5月）の分析を中心に－」『大学教育学会誌』34(2),pp.130-138
- 蝶慎一 2014「戦後初期の大学における『厚生補導』の活動領域に関する考察－『学徒厚生審議会』の審議過程と答申の分析を中心に－」『大学経営政策研究』4,pp.37-54
- 蝶慎一 2015「戦後日本における『厚生補導』の端緒に関する考察－『IFEL厚生補導部門』の実態とその役割を中心に－」『高等教育研究』18,pp.129-149
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 2016「『卒業認定・学位授与の方針』（ディプロマ・ポリシー）、『教育課程編成・実施の方針』（カリキュラム・ポリシー）、『入学者受け入れの方針』（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」
- 大学基準協会（2016）「『大学基準』及びその解説（改定案）新旧対照表」
(http://www.juaa.or.jp/updata/news/411/20160219_947412.pdf,2016.9.30)
- S.ゲルモン・B.A.ホランド・A.ドリスコル・A.スプリング・S.ケリガン 2001（2015）『社会参加する大学と市民学習－アセスメントの原理と技法－』（監訳 山田一隆）学文社
- 金沢大学 2016「平成 28 年度 国立大学法人金沢大学 年度計画」
(<http://www.kanazawa-u.ac.jp/wp-content/uploads/2016/04/3.h28nnendokeikaku.pdf>,2016.10.28)
- 木下康仁 2003『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い』弘文堂
- 木下康仁 2005「序章」木下康仁編著『分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂,pp.16-22.
- 木下康仁 2007『ライブ講義 M-GTA－実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 小林雅之 2016「高等教育における I R－特集の趣旨－」『高等教育研究』19,pp.7-8
- 小林雅之・山田礼子（編著） 2016『大学の I R－意思決定支援のための情報収集と分析』慶應義塾大学出版会
- 杉森公一 2013「初年次教育と、学習支援・リメディアル教育・初等中等教育を接続するには」『金沢大学大学教育開発・支援センター センターニュース』456
- 杉森公一 2014「バックアップ・ポリシー（学生支援・学習支援の方針）を成す要素」『金沢大学大学教育開発・支援センター センターニュース』488
- 杉森公一 2016「バックアップ・ポリシーを構成する要素」『金沢大学 第27回学生・学習支援研究会資料』
- 山田礼子 2016「アメリカにおける I Rの展開－ I R機能に伴う二面性と専門性を中心に－」『高等教育研究』19,pp.25-47

【洋書・海外論文】

- Natasha A. Jankwski., David W, Marshall. , 2015, "Degree Qualification Profile (DQP) and Tuning: What Are They and Why Do They Matter?"
NEW DIRECTION FOR INSTITUTIONAL RESEARCH, 165, pp.3-13
- Natasha A. Jankwski., Jillian Kinzie. , 2015, "The Role of Institutional Research in Institutional Engagement with DQP and Tuning"
NEW DIRECTION FOR INSTITUTIONAL RESEARCH, 165, pp.15-26
- Natasha A. Jankwski., Laura Giffin. , 2016, "Using the Degree Qualification Profile To Foster Meaningful Change. Urbana, IL"
National Institute for Learning Outcome Assessment (NILOA)
- Jessica L. Ickes., Daniel R. Flowers. , 2015, "Testing the DQP: What was Learned About Learning Outcomes?"
NEW DIRECTION FOR INSTITUTIONAL RESEARCH, 165, pp.27-41

ご清聴ありがとうございました。